かさまのれきし

第68回

牧野貞喜の発句「ふりむくは　啼く子の親か　田植え笠」を描いた日本画家 高崎興の作品（笠間市教育委員会蔵）

伝牧野貞喜公の頭部像（西念寺蔵）

笠間藩の名君 牧野貞喜 ～没後２００年に寄せて～

牧野貞喜の名を問われ、江戸時代笠間の名君を思い浮かべる方は少ないかと思います。友部・岩間両地区にお住まいの方は初めて聞く方が大半かも知れません。江戸時代の後半、貞喜は窮迫する笠間藩の財政再建などの藩政改革に挑んだ名君と称される藩主です。

延享四年（一七四七）、京都所司代であった牧野貞通が日向国延岡（宮崎県）より八万石で笠間藩主に着任、牧野氏笠間藩が成立しました。寛延二年（一七四九）、嫡男貞長が藩主を継承し、やがて大坂城代・京都所司代を経て天明四年（一七八四）に老中となり出世階段を上りつめ、やがて同職を辞任。寛政四年（一七九二）、貞喜に藩主の地位を譲り隠居します。

幕府の要職に就いたものの、貞長治世の笠間藩は財政の破綻という苦境に立たされました。後継者である貞喜はその克服に苦しみます。破綻の主な要因は年貢などの重い種々の負担や飢饉、そして貨幣経済が徐々に農村へ浸透してきたことで村での生活ができず、耕作を放棄して領外へ逃れる農民が続出したためです。貞長の藩主就任から文化七年（一八一〇）に貞喜が後半の改革に着手するまでの約六〇年間に、領内人口が一万人余減少しています。年貢の収納は、天明の大飢饉の最中であった天明六年の四万石を最高に、天明三年（一七八三）から享和元年（一八〇一）に至る一八年間、年平均一万九千石余の減収です。牧野家の家高が八万石、藩財政収入の大半を年貢収入に依存する同藩にとり致命傷でした。不足する藩の運営費は三井家・鴻池家など大商人からの借入が主でした。借入額（借財）は貞喜の藩主就任時に金三〇万両余、後半の改革着手時に金二七万両余です。

苦境に直面した貞喜が、この難局にどう対処したのか。これが貞喜の藩政改革です。藩財政再建のためには領内農村の復興が大きな課題でした。改革は、前半が稲田・西念寺の良水と提携した入百姓導入策（北陸地方の農民を招き入れて荒廃した領内農村を復興させる）を柱とし、後半は同藩の改革担当者を刷新して新たな改革に取り組む二段階に分けられます。従来の貞喜研究は、「名君」の名に押されて貞喜の人間像が美辞麗句で飾られた感があります。本年十一月から開催予定の特別展「没後２００年　牧野貞喜展 ―苦悩する名君　そして改革の軌跡―」では、市史研究員が牧野家文書および稲田・西念寺所蔵の史料等を読み込み、市内外の調査を交え、従来の研究を補って新たな貞喜像を打ち出そうと準備を進めています。「新型コロナウイルス感染症」に苦しむ現在の日本ですが、貞喜を取り巻く状況も現在の日本に劣らぬ逼迫した状態でした。漢学や日本の古典に精通した教養人貞喜の、家臣や領民を思いやる政（政治）とは何なのか、苦悩する貞喜の生きざまを笠間公民館の会場で確認してみてください。

（市史研究員　矢口 圭二）

特別展開催情報

「没後２００年　牧野貞喜展 ―苦悩する名君　そして改革の軌跡―」

会場：笠間公民館　２階展示室
期間：11月11日（金）～12月18日（日）
時間：午前9時～午後5時まで

問　生涯学習課（内線382）